

氏名	岡 知代	
学位の種類	博士(芸術)	
学位記番号	甲第37号	
学位授与日	平成27年3月25日	
学位授与の要件	学位規則第4条第1項	
学位論文題目	重層装飾論—漆の透過性を活かした重層的な装飾表現—	
審査委員	主査	金沢美術工芸大学大学院専任教授 橋本 真之
	副査	金沢美術工芸大学教授 田中 信行
		金沢美術工芸大学教授 山崎 剛
	金沢美術工芸大学大学院専任教授 横山 勝彦	
	工芸評論家 外館 和子	

審査対象作品数	11点
論文分量	本文A4判、182頁(69,565字)
附属の図録	A4判18頁、収録作品総数11点

論文要旨

岡知代の学位申請論文『重層装飾論—漆の透過性を活かした重層的な装飾表現—』は、第1章「漆という素材との出会い」、第2章「漆の透過性を活かした表現」、第3章「漆表面における世界観の構成」、第4章「重層的な装飾表現の探求」、および制作工程に関する章で構成されている。以下にその概略を記す。

第1章「漆という素材との出会い」は、漆という素材の基礎知識を整理した上で、漆との出会いから、制作の根底にある、素材の魅力を如何に見せるのかという考え方について論述した章である。

第1節「漆という素材」では、艶のある黒漆の塗面に、深くどこまでも沈んでいくような感覚を覚え、またそれとは少し異なる吸上げ技法の微妙な表情の魅力に惹かれ、漆を専攻した漆との出会いと、漆とはどのようなものであるか、その性質や採取方法、精製の仕方や種類、そして基本的な髹漆工程をまとめた。

第2節「原点“吸上げ技法”では、数ある漆芸技法の中で、博士後期課程まで盲目的に研究制作を行ってきた、変塗の一種である吸上げ技法について、技法の内容やその歴史の流れを考察した。

第3節「“漆”を見せる」では、当時の私の制作において最も重要であったのは、私が魅了された漆の魅力を如何に見せるかということであり、そのため具体的なイメージを連想させる要素は不要であり、意味を感じさせない模様や形態を選び制作を行ってきたことを、卒業制作《SURFACE04》と修了制作《URUSHI—SURFACE》を例に挙げて述べ本章のまとめとした。

第2章「漆の透過性を活かした表現」は、漆の魅力を見せるのみであった制作の展開として、透漆に代表されるような漆の透過性に着目し、そこから他塗料にはない漆の独自性について考えることで、自身のいう漆の表面というものの特徴がどのようなものであるのかについて論述した章である。

第1節「漆の透過性」では、素材としての漆の透過性について考察し、吸上げ技法からの作品の展開のきっかけとなった、水面の流れを意識し、色漆で模様を絵付けした《Bottom01》と、光が差し込んで見える水底の世界に焦点をおき、絞漆の凹凸の上に箔を貼り、模様を描き、透漆を塗り重

ねていった《Bottom02》について述べた。そこから、他の絵画素材では出来ない漆独自の表面を考えるにあたり、感覚として奥に沈んでいくだけでなく、実際に塗り重ね奥行きを作るということの意味の重要性、そして今まで表面だと思っていたものの内側に世界をつくりだすことを強く意識するようになった。

第2節「自身の考える漆の5つの独自性」では、“漆の透過性、塗り重ね、研ぎ出し、艶、吸上げ技法”という、自身の考える5つの漆の独自性から、自身のつくる漆表面とは、表層だけではなくその奥に存在する世界をも含んだものであることが見えてきた。その奥へと沈んでいくような感覚を、模様などの遠近法だけではなく、漆の塗り重ねや透過性により、実際に奥行をつくり出して見せることは、漆特有の表面の形成方法であるだろう。

第3節「漆の透過性を用いた伝統技法との違い」では、漆には様々な技法があるが、大きく言えば漆とは層の積み重ねで見せるものであり、その中で漆の透過性を用いることは決して特異なことではなく、梨地や溜塗り、白檀塗、春慶塗などの代表的な透漆の技法と、私の言う漆の透過性とはどう異なるのか考察した。一番異なる点は透漆を塗り重ねる回数の違いで、それらの技法は透漆の塗膜が薄く、その下にある変化は光が当たらずとも見て取れる。しかし私は、一見何も無いように見えるほど何層にも透漆を塗り重ねていく。だがその表面は黒漆のように暗く見えようと、有色透明膜であるため、光を当てると美しい飴色に輝き、その内側にある変化を見ることが出来る。一見単純な違いではあるが、この違いは作品における考え方や表現に繋がる重要な違いであると述べて本章のまとめとした。

第3章「漆表面における世界観の構成」は、漆の透過性を活かした従来の表面とは異なる、自身の表面を“漆表面”と名付け、“表層”と“内包世界”から成るその構成方法や、それに伴う作品における世界観の構築方法について考え、同時に自身の制作における最も違和感のない思考のプロセスの在り方について論述した章である。

第1節「“漆表面”という表面の考え方」では、そもそも表面とは何であるのかを、物理的な性質や触覚ではなく視覚による認知から考えていき、物質としての事実よりも、視覚によって自覚可能な固体と外界との界面のことを表すという、実体験として理解出来る表面の考え方からそれを捉える。それを踏まえると、作品において、視覚により認識出来る表面は、直接光が当たっていない場合の、一番表の暗い艶の面や吸上げ技法の隆起した部分などと、直接光が当たった場合の、透漆が透過し、現れる奥にある世界とが考えられる。つまり1つの作品の中において、光の条件の違いにより、表面であると見える部分が異なる。その二つの異なる見え方があるということが作品全体の表面の在り方となっている。ここで光を当てない場合に見える漆の暗い表面を“表層”、光が当たり、漆が透過することで見える、奥にある部分を“内包世界”、そして2つの表面が両立して出来る独自の表面を“漆表面”と名づけた。これは、漆の透過性を用いた新たな表面の在り方であり、漆独自の表面の構成方法でもあると言える。さらに、その考え方をふまえた《廻る》では、テーマのもと制作することへの違和感が強く、漆表面においていかにして世界観を構成していくのかを考えるにあたり、自身に最も合った思考の流れを確立しなければならぬと感じた。

第2節「漆表面における世界観の構成」では、表層と内包世界それぞれにイメージを持ち、それらが合わさることで作品全体の世界観が構成するということを、絞漆の上に箔を貼り、凹凸を残したままの《流02—濁の循環—》と、その上に透漆を塗り重ね、凹凸を完全に覆った《流01—濁の循環—》の制作から考察した。そこでは、表層の静謐と内包世界の混濁とが合わさり合い、表面全体は掴みどころのない幻惑的な世界をつくり出した。第3節「思考のプロセスの確立」では、先行するイメージからではなく、手の赴くままに描いていったスケッチから漆表面のイメージを決め、模様と漆芸技法によってその世界観をつくり上げていくという違和感のない制作のプロセスについて、深海という具体的なイメージから制作した《SURFACE04》、イメージを持たず、漆の物質としての魅力だけを見せようとした《URUSHI-SURFACE》、そして上記で述べた様な明確なイメージや対象物

からではない《流 02—濁の循環》とを比較し、どう異なるのかを述べて本章のまとめとした。

第4章「重層的な装飾表現の探求」は、第3章までで述べた、作品や制作における様々な要素の解釈の仕方をふまえ、作品において表現しようとしていることとは何であるのかを追及し、水や細胞という、目には見えないが存在する世界を手掛かりに、自身の自然物への見方と、漆表面という漆独自の表面の構成を用い、表現しようとしているものについて論じた章である。

第1節「水の世界」では、水に注目し、表現について考察した。そのために制作した《渦》では、模様の成り立ちをより細かく見ていくことで、表層と内包世界、そして作品全体の世界観をさらに明確にした。また表面構成は凹凸に箔を貼り、模様を描いて透漆塗り重ね、さらにその上に透漆での模様の絵付けと吸上げ技法を用いたより複雑な表面となっている。水底をイメージした内包世界は、奥深い内側で渦が増殖しうねりを成し、光が抜けていくことでその姿が現れる。水面をイメージした表層は一見静かで穏やかだがそこにも確かに水の流れが存在する。二つの流れが合わさった表面全体は、光が差し込むことで見える水底の流れと光の反射角度によって見える水面の流れが微妙な加減で重なり合うことで出来る掴みどころのない幻想的な水の世界をつくり出そうとした。そしてその世界観のもと、《渦 02》では漆を塗り重ねていく過程で箔を貼るタイミングを部分によって変え、内包世界をより複雑にするための技術的展開も試みた。

第2節「細胞の世界」では、水とは異なる、植物の細胞という世界について、箔を貼り模様を描き、透漆を塗り重ねた《透過—蠶 02—》とその上に吸上げ技法を用いた《透過—蠶—》から考察した。内包世界は、植物の細胞や被膜の奥に流れ蠶くものがあり、表層にも目には見えないが細胞の蠶きが存在する。それらが重なることで植物の細胞の現象や営みを表わそうとした。また新たな技術的試みとして制作した《流 03》と《蠶 03》では、これまで全面を漆で塗り重ねてきたが、漆で覆っていない部分も有る場合どう感じるのかを試みた。しかしはっきりと変化が見える部分があることにさほど魅力は感じなかった。やはり最も魅力を感じるのは、漆で覆った奥の世界と吸い上げ技法のような微妙な表情の世界、そんな無いようである、見えそうで見えない世界であると分かった。

第3節「自然界の無いようである世界」では、水や細胞の世界という考え方をふまえ、私が作品において表したいものとは何であるのかを《透過—葉—》の制作を通し明確にした。表面の構成としては箔の上に模様を二層重ね、部分的に黒の塗りや金色の粉を蒔いた所があり、それらの変化を透漆で覆っていく。そして再度葉脈のように箔を貼り、その上に透漆を塗り重ねている。この作品から見えてきたのが、初めて漆に惹かれた時に感じた奥に沈んでいく感覚や、層を積み重ね、一見何も無いように見える奥に様々な変化を含んだ世界をつくり出せることが、私自身の自然物の見方と繋がるということである。自然界のもの、葉や木や花、川や海などを見た時、目に見えるものよりもその内側にある細胞や微生物の動き、そして誰しもが感覚的に感じるだろう奥に蠶く何かの存在、それら目には見えないがあるだろう世界に強く惹かれ、そのような世界の存在を見ようとする。つまり一見何も無いような自然物の内側に広がる世界での微細で感覚的なイメージを、漆表面を通して追い求めていたのであると述べて本章のまとめとした。

制作のすべての根幹は、漆という素材と技法を如何に魅力的に見せるかということにあり、そこから見えてきた漆表面の在り方を、作品における“装飾”と考え、蒔絵などの加飾技法とは異なる、漆の透過性を用いた層を重ねて出来る“漆表面”を、本論では「重層装飾」と名付け、論述してきた。論述にあたり、各作品の制作工程に関する図と詳細な解説を付した。装飾とは何かを言いあわすのはとても難しく、過去から現在に至るまでの全てを包括した装飾を、端的にあらわす意味は存在しえないだろう。ただ装飾とは、モノに飾りを付随させることだけを意味するのではなく、装飾の「飾」の字が示唆するような、ぬぐい、取り去り、それにより浄化するという意味をも含むものである。また注連縄かざりのような、一定の場所を結界し、そこが絶対の唯一無二の場所であってほしいという願いでもある。装飾とは個別に対する聖別であり、それは「いま・ここ」に自分と

いう存在がいることを示したいという願いを表すものなのではないだろうか。つまり“装飾”とは自己の存在を社会に示す手段の一つで、飾るという行為は命の輝きとして、心の奥から湧き起こる感情の結果である。自分というただ一つの存在を示すためのものだからこそ、装飾のあり方は千差万別で、それぞれの人によって異なり、無限の答えをはらんでいる。作品制作において、自分の“装飾”とはどのようなものかを考え、その答えを持つとすることは、ただ「飾る」という快樂的な欲求だけではなく、自己の存在を社会に示すための造形思考への希求と言えるだろうとし、最後に今後の制作研究の展望も提示して、本論文の結びとした。

論文等審査結果

審査会は、申請者の提出論文及び研究作品が平成26年9月16日に行われた予備審査会に提出され了承された議論と内容に合致しており、また、その際に指摘された事柄に基づいてさらに発展させ、完成されたものであることを認めた。

主査の橋本審査員の進行のもと、口述試験ではまず申請者が本論要旨を、画像を用いながら述べた後、各審査員の質問に申請者が答えるという形式で行われた。

○口述試験概要

橋本審査員

橋本：今の発表でもありましたように、漆の世界にはいろいろな技法がある中で、漆の層に彫り込むことで層を見せる装飾効果に堆朱という方法がありますが、漆の透過性を作品構造とする装飾効果というのがあなたの場合は独特です。けれども、今後の問題として、装飾模様自体の現代性について、どのような展望を持っていますか。

岡：私の作品において模様は、一番に見せたいものということではなく、漆の透過性を活かして出来る漆表面という、独自の表面の中の現象を表すためのものです。模様という言葉を使うのは、描くものにはある一定の規則性と連続性があるということが重要で、そのことから模様という言葉を用いています。規則性や連続性を求める意味は今後より追求して、また漆の透過性を活かした独自の装飾の在り方における、現象を表すための模様をより追求していくことで、私なりの現代における模様の答えを出したいと考えています。

橋本：構造自体が装飾の仕組みなのだという考え方でですね。それは現代的な要素を持っていると思いますし、今までになかった装飾のあり方だと思います。ただ模様について、それが現代とどう関わっていくのかを今後も考えてほしいと思います。もう一つ、漆の技法の中で吸上げ技法があなたの最初の出発だったということですが、これの時間的制約についてお聞きしたい。制作上の時間的制約が大作には向かないというような判断がありますか。あるいは解決案の展望はありますか。

岡：吸上げ技法は上塗り・上塗り研ぎ・胴摺り・焼漆での模様描きを一連の流れとして行わなくてはならず、私のこれまでの経験上、上塗りから焼漆での描き終わるまでに2日以上かかってしまうと上手く吸上がらないように感じます。この技法を大型の作品に行う際の時間的な制約に対して、単純な解決法としては制作時の人手を増やすことですが、その他にも、まずは吸上げ技法を行う部分のみ上塗り研ぎをし、焼漆で模様を描いていき、それ以外の部分は後から研ぎ等を行っていくなどすれば十分可能で、今後技術的により修練し、工夫していけば問題ないと考えています。

橋本：大きなものでも、模様の密度といったものについても、工夫しながらの制作が可能だということですね。工夫を要する、そういう制約が、模様の形態にも関わってくるという方向がありうる

のかかもしれません。では、漆作品の経年変化について、またその対処法について、どのように考えていますか。

岡：月がたてば透漆の透明性は増していき、それにより奥に世界があることが少しずつ分かりやすくなっていきます。その変化もとても面白いものであると考えています。

橋本：わかりました。もう一つ、最後にお伺いします。岡さんの場合、支持体にアルミ複合金という材を使っている。その上にエポキシ樹脂、それから漆ですね。この支持体との密着、あるいは支持体の耐久性について、どう考えますか。たとえば油絵具など他の素材との差異、あるいは漆の持つ耐久性というようなことから、どうでしょう。

岡：支持体に用いているアルミ複合板と漆との耐久性については、現時点ではまだ研究途中で、今後も研究を進めていき、きちんと理解していきたいと思っています。

橋本：わかりました。

田中審査員

田中：先ほど岡さんの考える漆の五つの独自性について説明がありました。これはどちらかというところ岡さんの表現に必要な漆の特性と言い換えた方がいいと思います。一般論としての漆の特性や独自性と誤解されやすいので、まず指摘しておきます。さて、その漆の独自性について、漆の透過性、塗り重ねる、研ぎ出す、艶、吸上げと、五つの要素がありました。それらの要素が、岡さんの表現を成立させる上で重要だということですね。五つのうち空気に触れる表面のとらえ方について伺います。具体的には漆面の奥と、吸上げとの関係についてです。岡さんは吸上げ技法から出発し、漆の質感に魅かれ、その表面を生かすために吸上げ技法にこだわり、博士後期課程に入って透過に着目したことで表現が劇的に変わってきたわけですが、現在は両方を併用して表現に用いています。透過をテーマに考えたら、あるいは吸上げがなくても成立するかもしれない。その関係をお聞きしたいのです。奥に作る透過の表現、岡さんの言い方だと「内包世界」と「吸上げ」との関係について説明していただけますか。

岡：私が漆の透過性や吸上げ技法に着目したのも、それによって出来る、無いようである、見えそうで見えないという微妙な姿に、心惹かれるものを感じたからでした。そのため私の解釈の仕方としては漆の透過性も見え方も吸上げ技法の見え方も、そう大きな違いはなく、漆の透過性は内包世界をつくり、吸上げ技法は、浮き上がらせた模様によって、色の差異ではなく、映り込みや光の反射の微妙な違いで、表層にも表情をつくり出し、その二つが重なることでより複雑な漆での表面が出来ると考えています。

田中：よくわかりました。岡さんの吸い上げ技法は、非常に技術的にレベルが高くなっていると思いますので、表現の中で上手く生かしていくと、岡さんの表現の特色として、確かに可能性はあると思います。より研究を深めてください。次に、今、金沢21世紀美術館で発表している展示の最新作は床に置かれている作品ですね。岡さんは一時期、表面を生かすための様式、方法として、ミニマルな立方体や円柱を使っていましたが、空間に対する表現方法としての形態をともなった表現は、自信がないという理由でやめましたね。ただ今回はまた床に設置した。実は、私は床に設置すると聞き、それは平面と同じく薄いものだろうと思っていました。薄くて、漆表面が床に突然現れるようなイメージをもっていましたが、20cmの厚みにしたことは意外でした。また、側面にも装飾表現を施しています。さらに、少し浮かせていますね。床に平置きするのと少し浮かせるのとは、全く意味が違いますね。平置して床に吸い込まれるような面を作るのではなく、物体として、オブジェクトとして、強調していますね。壁面の作品はすべて、表面を見せることを強調するために薄い平面であり、形式も矩形ですが、最新作は違います。今回の最新作についての考え方を聞かせてください。

岡：これまで平面作品を主としてきたのは、作品において形態を作るということは非常に意味が強く、表面があくまで表面処理のように見えてしまうと感じていたからでした。ですが研究を進め、

自分の漆の表面に対する考え方などが明解になってきたことで、ではそれを今後どのように展開していくのかと考えた際、漆での表面を見せるための形態、そして漆の表面によって出来る空間をつくり出すことに再度試みてみたいと思い制作しました。また少し浮かせて展示することで床と一体化するのではなく、独立したものであることを強調させようと思いました。

田中：次の質問で今後の展望を聞きたいと考えていましたが今の話でわかりました。これまでの研究段階としては平面が中心でしたね。漆の表面を強調するために薄く見せていましたが最新作は直方体にして厚みをもたせました。そして、あくまで建築物には付属しないように見える展示をしています。今後の表現の展開にも関係していますが、透過だけを見せるなら、極端に言えばここにあるテーブルに表現してもいい。突然このテーブルに岡さんの漆面が出てきても、あるいは生活の中の、座卓などでもいい。透過の表面の世界を見せようとしたら、あり得ると思うのです。日常的な空間の中に、モノに、いくらでも展開はできる。要するに今後、透過の世界、表面の世界を考えようとした時に、ギャラリーとか美術館の場合は、あくまで絵画様式の矩形、あるいは立体物という表現方法が一番展示しやすいのですが、実はもっと表現の方法があるのではないかと思います。岡さんの表現には、そのような可能性があると思っています。

外館審査員

外館：岡さんの発表・論稿は、漆に対する自身の興味・関心と、それ故に漆にどのようにアプローチして試作していくかということ語る興味深いものでした。四つほどお尋ねします。田中先生の質問と少し重なるかもしれませんが、一つは「漆芸」、漆の作品というのは、そもそも表層で成立する表現だと思うのです。私も過去、ある論文で漆の表現を「レイヤード・アート（層の構築による表現）」という言い方をしたこともあります。工芸全般が実はそういう傾向があるのですけれども、漆は特にそれが象徴的に出てくる、表層が重要な表現だと思います。しかし岡さんの今回の論文で、その表層を「漆表面」と「内包世界」に分けて捉えている。漆の層を、ある線で二つに分けたその理由を、簡単に説明していただけますか。もし、それと吸上げ技法が関係するならば、それも併せてお願いします。

岡：そもそも「漆表面」という表面の解釈の仕方は、私の考える漆での表面と一般的な表面とでは言葉の指し示すところに微妙なずれがあるようで、そこにすごく引っ掛かりを感じたことが始まりでした。では私の言う表面とはどのようなものであるのか、考えていくと、漆で覆った先に一見何も無いように見える世界をつくり、さらに吸上げ技法によって、空気と触れる面に微妙な表情をつくる、その二つが重なって出来るものであり、そこから内包世界と表層からなる漆表面という解釈に繋がっていきました。

外館：ありがとうございます。次に、表層の奥にある「無いようである世界」を意識的に扱おうとしている所が岡さんの一つの特徴のように私は思ったのですが、今回の金沢21世紀美術館の展示やこれまで岡さんが発表してきた作品でもそうですが、その奥の世界というものを見せるための光との関係。岡さんの作品にとって光というファクターが、非常に重要な要素になっていると思うのです。単に一般的なライティングという意味で、ただ照明を当てているということではないはずです。漆の「透過性」との関係においても、それをかなり意識して取り扱わなければならないと思うのですが、作品にとっての光という要素について、ご自身ではどのように考えていますか。

岡：私ははっきり見えることよりも、無いようである世界に興味があります。光とはただの展示の装置というよりも、見えそうで見えない奥にある世界を、光を当てることでのぞき見るといふ、私の求める世界観をつくり出す一つの要素だと考えています。

外館：光が当たって奥がよく見える部分とよく見えない部分を、一つの作品の中に敢えて共存させて作品を見せる、それが一つの意図であるということですね。たまたまここに光が当たっているからここがハイライトで光っている、ということではなくて、いわば岡作品の内包世界へ導き、いざなう要素として光を扱っていかうということでしょうか。

岡：はい、そうです。

外館：三つ目の質問です。岡さんの論文によると、当初、漆の魅力を見せたいということから制作が出発しているので、最初から想定したイメージというものはなく、漠然としたものの中からイメージを手探りしていったということでした。制作のプロセスも、最初オートマティックに、無意識の中から生まれてくるようなものから始め、段々密度を上げていくような感じで作られています。それを自分で探っていくうちに、たとえば水、あるいは葉っぱの奥の方にあるような細胞などと、徐々に具体的なイメージと結びついて分析されてきたようなのですが、この論文の最後で、そのいろいろ具体化してきた言葉をあえて「装飾」という言葉で置き換えている。この文章で、自分の世界を「装飾」という言葉にこだわってまとめた理由を聞かせていただけますか。

岡：第1章から第4章は、自分が作品や素材、技法に対してのどう考えているのかの自己分析が主となっています。一つ一つの作品について考えていくことで、現時点での自分の考えや求めているものが明確となり、では最後にそれらが何であるのか問う際、ただ華やかなだけではない、自己表現のツールという解釈で、現代における装飾と捉えると、私のつくり出す漆表面やそれを通しての世界観とは、私の作品における装飾と捉えることが出来るのではないかと考えました。

外館：私の解釈としては、水とか細胞とか、論文中では具体的な言葉で分析してみたものの、実はそういう言葉に集約しきれない所へ岡さんは自分の表現を持っていきたいのではないかと、岡さんの制作行方、可能性のようなものを感じました。だから敢えて水です、細胞ですと分析して終わらせず、それを装飾という、大きいフィールドに戻してまとめたのではないかと思います。では最後に、自分の漆の世界が、過去のいろいろな作品と比べて、あるいは現代の他の人たちの漆の表現と比べて、最も独自性が強いとご自身で考えている所はどこでしょうか。

岡：蒔絵などの加飾に代表されるような、目に鮮やかなものとの違いは分かりやすく、見えそうで見えないという世界に注目することが、それらとの違いを引き出していると思います。また黒漆などの艶の有る塗りの表面も、沈んでいく感覚を覚えると思いますが、私の言う漆表面とは感覚だけではなく、実際に漆で覆った奥に世界をつくっており、その点が異なっていると思います。

外館：ありがとうございました。

横山審査員

横山：まず作品を展示した時の照明の話ですけれども、たとえば論文の64頁に「鑑賞者が作品に近づくともライトが光るようにするなど」と書いてあります。そうすると作品自体が自立するよりも、ライティングなどに依存していく恐れがあるのかなという気がします。今後、作品の展示の時にいつでも岡さんが立ち会えるわけではないですし、そういったことも含めて、いわば作品のコンセプトをもっと実現するためには、作品の形状についての工夫がまだ必要なのではないかと感じます。作品の見せ方についての意識、考えというのはありますか。

岡：私は、場をつくるための展示での仕掛けを過剰にしまうと、作品が漆である必要性はどんどん無くなっていくように感じます。そのため過剰な展示での演出は避けたいと考えています。また私の求める表面をより分かりやすく、どのような展示の条件でも見せていくことができるようにするために、展示での仕掛けの工夫ではなく、作品内において、いろいろなことに試みることが必要であり、ひいてはそれが作品をさらに魅力的にしていくことにも繋がるのではないかと考えています。

横山：漆の表面を見せたいということはよくわかるのですが、その見せ方として薄くする必要はないと思うのです。そのあたりは是非研究をしていただきたいと思います。次に「おわりに」で、「漆表面のあり方を私の作品における装飾と考える」とあります。この言葉が典型的で、全体として出発点からかなり装飾にこだわっておられたけれども、もはや装飾という言葉にこだわる必要はなくなっているという気がするのです。もう一つ、装飾の問題を考える時にはオーナメントとデコレーションということがあって、デコレーションは飾り立てるものでオーナメントは機能と合体してい

たりする。岡さんの言いたい精神的な意味での装飾というところからつながっていきます。つまり岡さんは装飾を作りたいのか、漆表面の魅力を伝えたいのか。これはかなり違ってくるといえる危惧があるので、そこを今後は整理されたいと思います。加えてもう一つ、論文の14頁で「何かのイメージを具現化することと漆の魅力をj見せるということを同時に成り立たせることは云々、私に違和感がある」と言っているのですが、原理から考えると、イメージを具現化することと漆の魅力をj見せることは同時に成り立つのではないかと思います。さらにイメージとは、具象的なものだけではなく模様や幾何学的な形もイメージですから、模様やイメージとの関係というのは、将来の展望においてはもっと展開していく余地があると思いますので、さらに研究をしていただきたいです。それとこの「別冊」ですが、これは岡さんが漆にこだわっていて、その制作工程ですので、むしろ非常に大事なものです。付録ではなく本文だと思いますので、是非本文の中に第5章として組み込むべきだと思います。

山崎審査員

山崎：まず基本的な特色として、漆の層を重ね、その上に吸上げ技法を施すのが独自のものだと主張されていますね。今一度ここで、歴史的に見て、特に戦後日本の漆表現におけるパネル作品との違いを整理して主張していただけますか。

岡：これまでの漆のパネル作品は目に鮮やかに描いたものが見えているのですが、私の作品では漆の透過性や吸上げ技法を用い、見えそうで見えない世界をつくり出しており、そのため、描いたものははっきりとは見えないところが異なる点ではないかと思います。

山崎：たとえば戦後のパネル表現の中で、吸上げ技法はどのように使われてきましたか。

岡：私が調べた中では、パネル表現で吸上げ技法が用いられたことはないと思われます。

山崎：最後の仕上げのところで朱合呂色を使いますね。

岡：朱合呂色漆と、最近では透箔下漆も用いています。透漆は黄色味と赤色味をしたものがあり、赤色味のあるそれらの漆を用いています。

山崎：時間の流れについての考え方を伺います。これは経年変化の問題とからむのですが、最後の仕上げのところで朱合呂色漆や透箔下漆も用いて、艶をあげることで奥が見えていきますね。そして時間が経つてくると確かに見えない部分が見えてくる。しかし何年も先の話ですが、艶が完全に飛んでしまって、表面がマットな状態になったとしたら今度は逆に見えなくなる。作品そのものに人生があるとしましょう。岡さんは作品が歩む人生をどうとらえているのでしょうか。

岡：制作する際は仕上がった状態が自分の中で最良だと思う状態になるように制作しますが、時間の経過とともに、透漆が透けていき、そして艶が消えていくことはあると思います。ですがそれを塗り直したり、艶を上げ直したりと初めの状態に戻すことは可能ではありますが、そうしたいとは考えていません。その変化は、漆という天然素材を用いる面白さの一つであり、そのような変化の流れも作品の魅力の一つと受け止めています。

山崎：わかりました。同じく時間の問題です。美術館のように一定の環境のもとで一定の光を当てるのではなく、自然光のもとで展示した場合、その光は時間によって刻々と変化しますね。そういった、当たる光の時間的な変化をどのようにとらえていますか。

岡：自然光のもとで私の作品を見た際、一日の中で見え方が変化していくのは面白いことだと思っています。また時間の流れでの変化だけでなく、同じ時でも見る角度によって見え方は異なり、そのような見る角度での違いや時間の流れの中での違いがあることは、私の作品の魅力の一つだと思っています。

山崎：今の見る角度の問題ですが、立体の状態にすると壁にある状態より、見る角度のバリエーションが増えると思います。そういった状態をどうとらえていますか。

岡：見る角度で見え方が変わるというのは、私の作品における面白さの一つであり、床置き作品においては、そのことをより強調することが出来ていたと思います。また今後は、平面のパネル作

品においても、より見え方の変化が出るようにするには、どのようにしたら良いかについても試みていきたいとも考えています。

山崎：今回論文を書いてみて、言葉にできないことを必死で言葉にしようと思いましたね。たとえば模様についてなら、模様はどのように生成してくるかということ言葉をしようとしたわけですが、その言語化のプロセスを振り返ってどう思いますか。

岡：私はとにかく漆が好きで、その魅力を見せるには、何かを表すというのは邪魔なことであると考えていました。ですがそうではないと感じ、自分の作品や考えについて振り返ってみると、自分の事であるのに分からないことばかりでした。そこから一つ一つの作品と向き合い、絞り出せるだけの言葉を出していき、それらはゴニョゴニョなどの擬音語や稚拙な言葉も多く、出来ることなら、かっこいい言葉を使いたいと思っていましたが、それは自分と向き合い、もがき、模索したりリアルな言葉ではないと感じました。また「渦」の模様の出来るまでの過程を細かく見せているように、どう考えていったのかを細かく見せることで、かっこいい言葉で表せずとも、私の模様に対する考え方を分かりやすく表していけるのではないかと考えました。今回の論文は、自分の中から出てきた言葉を、着飾ることなく書くことができたと思っています。

山崎：それでもなお、装飾という言葉を手放さず、こだわったのはどういうことですか。

岡：私は、現時点では装飾を自己表現のためのものとして解釈していますが、装飾は時代の変化とともにその解釈は変化していくもので、それは私の漆表面という考え方も同じであるべきだと感じています。今回出てきた、内包世界と表層や自然物なども、それに限るのではなく、常に進化させていきたいと願い、それを装飾という言葉が誘発してくれるのではないかと考えています。そのため自分の考えをまとめるという意味で、最後までこだわって装飾という言葉を使いました。

山崎：岡さんは、制作工程において自身の内面から絞り出すように模様を描き、最後に漆で塗りこめて見えなくしてしまいます。論文もやはり自身の内面から絞り出すように言葉をつむいできた。それを最後に装飾という言葉で塗りこめたようにも思えますね。制作における技術的なプロセスと執筆における思考のプロセスがシンクロするようで、私はとても興味深く感じます。

補足質問等

田中：講評に入る前に、私の方から一つだけ指摘しておきます。装飾についてですが、確かに時代によって装飾のとらえ方や表現方法は変わると思います。けれども先ほどからの発表を聞いていて気になったことがあります。岡さんの装飾の考えを強調するために、装飾を快楽的な欲求のために飾る行為と決めつけて、説明し過ぎていると感じる所があります。装飾する行為とは人間にとって深いものです。誰もが、人間の心を豊かにするために、実生活を豊かにするために、或いは自身の存在を示すための本能的な行為として、装飾の意味があると思います。岡さんが考える装飾についても本質的には同じかと思いますが、説明するための一般論としての装飾のとらえ方や言い方が気になりましたので、指摘しておきます。装飾という行為は、古代から人間の精神に深く関係し非常に深いテーマです。岡さんの作品においては、モダニズム的な考え方に対して、あえて装飾性を表現に用いた意図があります。装飾をどうとらえるかは岡さんの表現にとって非常に重要です。「私は精神的な世界を求めています」という「精神的な装飾」を考えたならば、実はそこに、今後の表現の展開の大切な要素があるかと思っています。自分の精神的な装飾の世界を表すためのふさわしい表現方法は何か、あるいは形は何かと。単に図柄、模様だけの問題ではありません。

橋本：最後に一言付け加えさせていただきます。今後あなたの仕事にとって意味を持つかもしれないと思いますので。金沢21世紀美術館で見た作品の中で、少し驚いたことが1点ありました。壁に2枚並んでいる最新作、あれを見た最初の瞬間に、二つの表面が距離感をもって、違って見えたのです。意外な経験でした。左側の場面の方が手前に見えて、右側の暗い方の場面が奥に見えたのです。同じ位置にあるのに違って見えた。これは漆の特性なのですね。それに気づかされてちょっとびっくりしました。そのことについて、もう一回確認してみてもいいと思っています。

○審査の講評

橋本審査員

これまで模様の場合は平面上の装飾というのが一般的でしたが、奥行きとしての装飾の仕組みを考え始めたことが、装飾構造としてなかなかおもしろいと思います。漆の世界の中で、今後どう展開ができるかというのは、岡さんの今後の課題ですけれども、楽しみにしています。若手ですから。博士の学位にふさわしいと思います。

田中審査員

修士・博士の6年間、岡さんの研究・制作を身近に見てきた者として、学位申請論文および満期発表における研究の成果に、よくここまで努力し到達したなと思います。そのことをまず評価したいと思います。岡さんの制作は、極めて素朴に、漆の質感に魅かれて出発したことから始まり、その後、吸上げ技法を用いた表現に傾倒しました。博士後期課程になり、透き漆独特の透過性に着目したことにより、表現が劇的に展開し始めました。論文でも説明しているように、漆芸には透き漆を生かした様々な技法がありますが、透過された内側に表現世界を見出し、漆の透過性をテーマに美を構築していく視点は非常に独創性があります。そのことを緻密な実験や制作を通して研究を続け、それが新たな漆表現の可能性を感じさせるものになったことは、高く評価したいと思います。透過の内側にある、岡さんの言葉を借りれば「内包された世界」を表すために、豊かな表現を獲得するために、模様を今後どう展開させるのか。装飾に対する考え方をどう深めるのか。矩形を用いた表現方法や今回の新作で見られるミニマルな形体など表現形式についても、今後のさらなる研究を期待したいと思います。研究論文、作品、今日の口述試験を総合的に判断し、博士の学位にふさわしいものとして認めたいと思います。

外館審査員

岡さんが制作者である、ということを積極的に出した論文・研究だと思います。制作者というのは必ず、制作の中でいろいろな気づきがあると思うのですが、漆の層、レイヤーという構造や透過性という性質に着目して、そこに焦点を当てて掘り下げた。そしてその気づきを、これから岡さんが制作の上で戦略的に扱っていく。その大きな土台を、今回築いたと思います。そういう意味で、非常に有意義な論考です。ほかの制作者が読んで参考になる論考ではないかと思います。岡さんは漆芸のもっている奥行きの表現を制作と論文で真摯に探求しました。それは、ひいては人間の視覚、見るという行為と漆表現との関係や在り方をも探るような内容を含んでいる。そうしたことを漆で表現することを通して、今後、世の中に問うていける、その可能性に満ちた土壌を、今回この論文と作品制作によって築いたという意味で、私も、博士の学位にふさわしい研究であり作品であると判断しています。

横山審査員

詳細な制作工程に関する記述を付し、論文の最初に漆工辞典の記述をあらためて振り返り、ベーシックなことをきちんと自分のものにした上で独特の表現を模索している。たぶん岡さん自身もこれからどんどん変わっていきけるのではないかという気がします。現時点における報告であり作品だと思うのですが、今までの経験をこれから生かしていただきたいと思います。さらに、論文のまとめにも「自己の存在を社会に示すための造形思考」という言葉がありますが、まさにこれからアーティストとしての第一歩を踏み出し、これから始まるのだという意識で深めていただきたいと思いますという期待があります。学位に相応しいと判断しています。

山崎審査員

まず、横山先生のご意見のとおり、現状では第4章までになっていますが、第5章として是非この制作工程に関する記述をきちんと組み込んで、仕上げていただければと思います。私の方が評価する点は次の三つです。一つ目は、これまで手掛けてきた、漆を積層させることによって内奥の世界を表出し、そこに吸上げ技法を組み合わせるといふ、独自の技術を高いクオリティーで実現できていること。これは間違いなく日本の近代・現代における漆表現の歴史の中で独創的な存在だと思います。次に、作品の経年変化がもたらす魅力。時間が経つと見えなかった部分が見えてくる、という時間の流れが作品のコンセプトの大切な要素となっていることにも独自性を感じます。最後に、技法的な特徴、とりわけ制作工程に関する事柄を詳細に言語化し、その作品に寄り添った具体的な研究をもとに、自分自身にとっての装飾の意味を真摯に考え続けたこと。以上の点を高く評価し、博士の学位にふさわしいと考えます。

以上で岡知代の博士学位審査を終了した。

総 合 評 価

審査員一同、論文及び研究作品を優秀と認め、博士学位に相応しいものと高く評価した。